

平成五年度春期東洋学講座講演要旨

(古代文字の解読研究)

第四一五回 五月二五日(火)

西夏文字解読の話

文部省学術情報
センター教授

西田 龍雄

一、西夏語の研究は、コズロフが見付けた西夏語と漢語の対訳単語集『番漢合時掌中珠』(A.D.1190)から始ったが、一九五〇年代までは、コズロフ収集品中の主要な資料はほとんど公開されなかつた。六〇年代中頃以降、中国古典(論語、孟子、孝経)の翻訳がはじめて公表され、そのうち韻書、文学、法典などの原資料も容易に見ることができるとなつた。筆者が研究しはじめた頃には比べると、正に隔世の感がある。そして近年西夏語の研究は著しく進展した。

二、西夏文字は表意文字であるため、基本的には一字毎

に、字形の構成、発音、意味を決めていかねばならない。現在発音は全体六千数百字の中、九〇%、意味は七〇%から八〇%ぐらいわかつてゐる。文法の研究も進み、文字の背後にある言葉として西夏語が複元されてきて、他言語との系統的な関連も追究されている。

三、まず西夏語と西夏文字のずれについて、簡単な例をあげる。『掌中珠』などから 𐵇 は「人」、 𐵈 は「心」であり、「人」は $-\text{r}^{\text{h}}\text{w}^{\text{h}}\text{ia}$ ($\text{L}^{\text{h}}\text{𐵇}\text{𐵈}\text{𐵉}\text{𐵊}\text{𐵋}\text{𐵌}\text{𐵍}$)、「心」は $-\text{ni}^{\text{h}}$ ($\text{𐵎}\text{𐵏}\text{𐵐}\text{𐵑}\text{𐵒}\text{𐵓}\text{𐵔}$)と読んだことも、『文海』などの反切を操作して判明している。しかし、「人」 $-\text{r}^{\text{h}}\text{w}^{\text{h}}\text{ia}$ は、いつもこの文字で書き表わされているわけではない。「仙人」 $\text{𐵇}\text{𐵈}$ ($\text{𐵉}\text{𐵊}$) $-\text{r}^{\text{h}}\text{w}^{\text{h}}\text{ia}$ では、漢字の人に似た字形が別に造られている。 𐵇 𐵈 つまり西夏文字一字が西夏語の意味単位一つを代表しているわけではない。まずこのような事情を明確にしておく必要がある。

四、西夏文字は画数が多く憶えにくいという難点がある。大体一〇画以上で一〇画から一三画ぐらいに集中してゐて、漢字のように一画から三画ぐらいの簡単な字形は全くない。しかし西夏人の中で二〇〇年以上使われており、草書体、行書体文書も数多く残っている。書き違い読み誤りも多い。たとえば近年西夏人の作った法典『天盛旧改新定律令』 $\text{𐵇}\text{𐵈}\text{𐵉}\text{𐵊}\text{𐵋}\text{𐵌}\text{𐵍}\text{𐵎}\text{𐵏}\text{𐵐}\text{𐵑}\text{𐵒}\text{𐵓}\text{𐵔}\text{𐵕}\text{𐵖}\text{𐵗}\text{𐵘}\text{𐵙}\text{𐵚}\text{𐵛}\text{𐵜}\text{𐵝}\text{𐵞}\text{𐵟}\text{𐵠}\text{𐵡}\text{𐵢}\text{𐵣}\text{𐵤}\text{𐵥}\text{𐵦}\text{𐵧}\text{𐵨}\text{𐵩}\text{𐵪}\text{𐵫}\text{𐵬}\text{𐵭}\text{𐵮}\text{𐵯}\text{𐵰}\text{𐵱}\text{𐵲}\text{𐵳}\text{𐵴}\text{𐵵}\text{𐵶}\text{𐵷}\text{𐵸}\text{𐵹}\text{𐵺}\text{𐵻}\text{𐵼}\text{𐵽}\text{𐵾}\text{𐵿}$ が注目されているが、

その書名の三字目「旧」^𠄎を長い間、筆者が指摘するまでは、「年」^𠄎と読み誤っていた。

五、西夏文字の中には、漢語からの借用語を書く字形もかなり多数混在しているが、文字面だけでは判別できない。「改」^𠄎 ^𠄎 (F36) に対する ^𠄎 (H10) が漢語「易」を書き表わしていることは、その発音から判明する。意味の解説には、このように発音の再構成が絶対に必要になる。

ある断片の中で、人名の前の三字が書かれている。^𠄎 ^𠄎 ^𠄎 これは ^𠄎 ^𠄎 ^𠄎 と読めるから、チベット語 ^𠄎 ^𠄎 ^𠄎 ^𠄎 の借用形であるとすぐに理解できる。

六、意味の決定、とくに字義ではなく、単語としての意味、詞義の決定は厄介である。現在推定されている詞義の多くは修正がある。また「動物名」「樹の名」といった指定は十分ではないことはよくわかるが、具体的な名称が見付かるのはむしろ幸運なときに限られる。

意味の決定には概略つぎの方法を使っている。

(a) 経典などで実際に使われている例を集める。たとえば『大宝積経』の中で、1 ^𠄎 ^𠄎 2 ^𠄎 ^𠄎 3 ^𠄎 ^𠄎 …… 4 ^𠄎 ^𠄎 の動物名が列举されている。1 獅子、2 虎狼、3 麒麟、4 熊熊で4のあとの文字は「ひぐま」であ

ることがわかる。西夏人が編纂した単語集『雑字』の中にも4は登録されるが3はない。麒麟は仮空の動物として「飾りのある駿馬」と造語翻訳されていた。

(b) 上記「雑字」を活用する。つぎに列記された1、2、3、の中、1と3がいずれも「鼠」であると、2も同義であると推定できる。1 ^𠄎 ^𠄎 2 ^𠄎 ^𠄎 3 ^𠄎 ^𠄎

(c) ^𠄎 ^𠄎 ^𠄎 ^𠄎 ^𠄎 ^𠄎 この二字の正確な意味は、最近までわからなかった。ところが『金光明経懺悔滅罪伝』の中で、閻魔の使者が張居道の前まで近づいてくる場面に使われているところから、「目の前」の意味にとった。やがて

スタイン収集品の残片に『貞観政要』の西夏訳を見付けたが、その一枚に「太宗、侍郎王珪ト宴ニ坐シ語ル……欠……側ニ侍リ立ツ」と読めるところがあつた。「側ニ」にあたる直前に「時ニ美人有リテ」と一字が欠けるがそこに同じ ^𠄎 ^𠄎 が使われている。この二字はより正しくは「そばに」の意味であつたと解説できる。

七、文法現象として注目すべきは、動詞が人称接辞をとることと、六形式を一セットとする二系列の接頭辞の存在である。二系列の一つは動作の方向を指示するもので、いま一つはその方向と祈求の形が融合した形である。たとえば ^𠄎 ^𠄎 ^𠄎 ^𠄎 ^𠄎 ^𠄎 集つて来た、^𠄎 ^𠄎 ^𠄎 ^𠄎 ^𠄎 ^𠄎

集つて(来て)ほしい。この α は「話者に近づく」方向を示していると解釈し、 β は、その α と祈求の γ が凝集した形式であると考える。この形態は現在四川省の西北地域で話される羌語に類似して、両言語の系統的なつながりの検討が課題となる。

八、今後、西夏語の研究は、テキストの読破と共に更に進展する。しかし二〇〇年以上続いた西夏語はそれ自体変化しているのである。たとえ以上に述べた六つの方向を示す接頭辞は、やがて特定の動詞には特定の接頭辞が固定的に使われ、しかも過去時制を表現する機能に変わって来ている。それ故、各テキストの成立年式の決定が重要になる。九、最後に、知識の体系として見た西夏文字の特徴について述べた。

第四二六回 六月一日(火)

アルファベットの起源と発展について

東洋文庫研究員 薮 勇 造
東京大学助教授

アルファベットとは、当該言語の有する音素の一つ一つ

に異なつた記号(文字)が対応するという、一字一音の原理に基づく表記体系のことをいう。現在世界で用いられている文字は、漢字及びそれから派生したものを除くと、あとは殆どすべてがアルファベット系で、しかもそれらは現在の形こそ違え、起源は一つであると考えられている。ではその起源は何時何処にあり、そこからどのようにして諸系統が派生したのか。この問題に関する近年の研究動向を紹介するのが本講の趣旨である。

一般にはアルファベットはセム系の民族によつて創始されたというのが通説となつているが、実は古代エジプト人が既に二四の子音文字からなる所謂「エジプトのアルファベット」というものを有していた。しかし表意文字を中心とするエジプト語の表記体系の中で、この子音文字群は補助的な機能しか果たさなかつたため、普通エジプト人はアルファベットの創始者とは見なされていない。一九〇五年にピートリーがシナイ半島で発見した所謂「原シナイ文字」(紀元前二千年紀中頃)がアルファベットと判明したとき、人々はこれこそ最古のアルファベットに違いないと考えた。しかしその後かつてカナーンと呼ばれた東地中海沿岸部より同種の文字の発見が相次ぎ、しかもそれら(原カナーン文字と呼ばれる)のうちの幾つかは原シナイ文字より若干古いのではないかと言われる。そこで現在のところ